

見えない痛みに気付く目を

小六

ある日、駅の改札で、

「早く行けよ、じやまなんだよ。」
という声が聞こえました。

声の主は、足の不自由な男の人その後ろに立っていた、イライラした表情の男性でした。足の不自由な男の人は、ゆっくりと足を引きずりながら歩いていました。私も周りの人々も、何も言わずにその場を通り過ぎました。

私はその言葉が頭からはなれませんでした。なぜ、こんなにも冷たい言葉が言えるのでしょうか。足の不自由さは、その人にとって毎日の生

活でとても大きな困難をともなうものだと思います。それに、見た目でわかる痛みは、周りの人々が想像している以上に大きいはずです。でも、言葉でさらにその人を傷つけることは、何の解決にもなりません。むしろ、傷つけ合うだけです。

私は、過去に足を骨折したことがあります。松葉づえをついて歩かなければならず、階段を下りるのも一歩一歩が大変でした。普段は当たり前にできていたことが、できなくなることの苦しさを感じました。特につらかったのは、周りの人が私の困っている姿を見ても、何も言わず通り過ぎていくときです。助けを必要としていることを伝えられずに、ただだまっていることがさびしく感

じました。でも、友達が、

「荷物を持つよ。」

「だいじょうぶ？」

と声をかけてくれたとき、その一言
がどれほどうれしかったことか。言
葉にすることで、私は一気に安心で
きたし、少し元気をもらつた気がし
ました。友達の優しさが、私にとつ
て何よりの支えだったのです。あの
とき、私は「こんな小さな言葉が、
こんなにも大きな力になるんだ。」と
実感しました。

しかし、すべての人人がこうして助
け合い、支え合っているわけではあ
りません。駅で見たように、足の不
自由な人に対して冷たい言葉を投げ
る人がいます。言葉一つで、相手の
心に大きな傷をつけることができる

のだということを、私たちはもつと
理解するべきです。心ない一言が、
その人の一日を、いや、一生を変え
てしまうかもしれません。

だからこそ、私たちは「見えない
痛みに気付く目」をもたなければな
らないと、私は強く思います。体に
障害のある人々、例えれば車いすを
使っている人や、視覚や聴覚に障害
がある人たちは、私たちが思つてい
る以上に大きなかべにぶつかりなが
ら一生けん命生きています。そのか
べは、周りの無理解からくる偏見や、
時には心ない言葉によつて、さらには
大きくなってしまうことがあります。
私たちができることがあります。
ようとする」とです。自分が何か
を感じ取ることで、少しでもその人

のつらさや痛みを理解することがで
きるからです。見えない痛みを無視
することなく助けるために行動を起
こすことが、私たちの責任だと思いま
す。私ができることを考えたとき、
まず思いうかんだのは、「声をかける
こと」でした。例えば、電車やバス
の中で大変そうに荷物を持つている
人がいたら、「お手伝いしましよう
か。」と声をかけること。それだけで
も、相手にとつてはどれだけ心強い
かわかりません。また、街中で困っ
ている人を見かけたとき、何も言わ
ずにそのまま通り過ぎるのではなく、
「どうしたのですか?」と声をかけ
ることも大切だと思います。こうし
た小さな気付きが、少しづつ大きな
力になっていくのではないでしょう

か。さらに大切なのは、障害のある
人々に対する偏見をなくすことです。
彼らの「ちがうところ」を見て、そ
こに無理解や差別の目を向けるので
はなく、その人がどんなに強く生き
ているかを見つめることが必要です。
私はこれからも「見えない痛みに
気付く目」を大切にして、身の回り
の人々に優しく接していきたいと考
えていきます。そして、優しさが当た
り前の社会を作るために、自分がで
きることを一つずつ実行していきま
す。